



大須二子山古墳出土胴丸式挂甲 南山大学人類学博物館蔵

大須二子山古墳は名古屋市中区門前町にあった前方後円墳で、道路拡張工事や名古屋スポーツセンター建設などにより現存しない。

ここに紹介する挂甲とは、小札と呼ばれる縦長の鉄板を綴じ合わせた札板を上下に緘してつくった甲のことである。大須二子山古墳の甲は、全体が垂直に潰れ込み、偏円形のドーナツ状をしており、前竪上4段・後竪上5段・長側2段・腰札1段・草摺4段から成っている。原形を復すことのできる挂甲の出土例は少なく、きわめて貴重な資料である。小札を綴じるのに用いた皮紐や、札板を綴じるのに用いた組紐も観察できる。

この他当館では大須二子山古墳出土資料として、襦襷式挂甲片、衝角付甲、フ字形鏡板巻や杏葉などの馬具、画文帶神獸鏡、円筒埴輪、須恵器などを展示・収藏している。

目 次

● 愛知県博物館等職員研修会	2
● 第31回東海三県博物館協会交流研修会	3
● 「平成18年度部門別研修会」の報告	4
・自然科学部門研修会・歴史民俗部門研修会・美術部門研修会	

愛知県博物館等職員研修会

平成18年度愛知県博物館等職員研修会は、平成18年10月19日(木)、20日(金)の2日間、七宝町七宝焼アートヴィレッジを主会場として開催された。

1日目は「地域に根ざした博物館活動のために」というテーマで34人の出席のもと、県内の事例発表と質疑を行った。今年度のテーマの設定にあたって意識したのは、博物館入館者の減少、公立博物館施設への指定管理者制度導入の広がり、そして各地ですすむ市町村合併による自治体の再編に伴う公立施設の新たな位置づけなど、ここ数年間に起こった博物館施設をとりまく環境の大きな変化であった。

昭和から平成にかけて各地に設立された多くの加盟館が、その地の歴史・文化の拠点として大きな役割を果たしてきた実績を踏まえ、もう一度地域に根ざす活動を展開していくことが今後の博物館施設にとって、公立私立を問わず重要なことだと認識するにいたった。

そこで、次の3館の事例発表をお願いすることとなった。

① わが町を誇れる場所に

—歴史・文化観光ボランティアの養成—

蟹江町歴史民俗資料館学芸員

伊藤 和孝氏

② 消える町の名をどこに残すか

—市町村合併と収蔵資料—

豊田市郷土資料館学芸員

杉浦 裕幸氏

③ 伝統工芸を伝える場として

—七宝焼アートヴィレッジの開設まで—

七宝町七宝焼アートヴィレッジ

ふれあい伝承館長 佐藤 茂満氏

- ① の伊藤氏には館の設立以来、その活動の中で、町の観光資源の発掘と、ボランティアの養成までを資料館の活動の中に取り込み、館内の活動にとどまらない町おこしの原動力をつくるにいたった経過をお話いただいた。
- ② では、県内で最大の合併を実施した豊田市に新たに加わった各地の資料館施設とその収蔵品の活用策について進められている議論をまとめていただいた。
- ③ では、地域の伝統工芸品である七宝焼を軸として目指している町づくりの経緯とその活動状況について館内の見学を含めて報告された。

2日目は12人の参加のもと蟹江町の歴史・文化観光ボランティアの方々による町内の文化財案内の実践活動を見学した後、愛西市八開郷土資料保存室にて愛知県の米国移民関係資料の見学をした。

今回事例発表いただいた各活動についてはまだその端緒についたばかりのものであり、自治体合併後の各施設の再編成については今後多くの館が直面する問題だと思われる。これらを含めた博物館とその地域とのかかわりについては公私立を問わず続けて考えていくべきテーマであるだろう。

(七宝町七宝焼アートヴィレッジ 小林弘昌)



第31回 東海三県博物館協会交流研修会

平成18年、創立40周年を迎えた当協会は、今年度も東海3県（愛知・岐阜・三重）の博物館関係者が一同に会して友好を深め、それぞれの館が抱かえる課題などについて情報交換する恒例の研修会を岐阜県で開催した。

■平成18年11月14日(火)

会場：高山市立図書館 煥章館

参加者：64名 愛知県12名

岐阜県41名

三重県11名

テーマ：「地域文化と公共施設」

地域文化財の保護・保存と観光振興等に係る博物館の課題、役割等について、各県の取り組み、事例紹介等により研究を深める。

①基調報告

「地域文化と公共施設」

岐阜県現代陶芸美術館

館長 横本 徹

②愛知県の事例発表

「地域博物館と公共施設」

愛知県博物館協会職員等研修会より

七宝町七宝焼アートヴィレッジ

課長補佐 小林弘昌

③三重県の事例発表

「斎宮歴史博物館の現状と課題」

斎宮歴史博物館

主幹 松田珠美

④岐阜県の事例発表

「城下町高山の未来設計」

高山市教育委員会 文化財課長

高山市郷土館 館長 田中 彰

■平成18年11月15日(水)

現地調査・飛騨地域の会員館園の視察

来年度（第32回）は三重県において開催される予定。



「平成18年度部門別研修会」の報告

〈自然科学部門研修会報告〉

今年度の自然科学部門の研修会は、身近なもので自然科学に関する実習をすることとした。題して、「食卓で学ぶ自然史」。食卓にのぼる魚介類を使って、手軽に観察できる手法を学ぼうというのが狙いである。材料として用意したのは、アジのひらきやシラス、サザエなど、ご飯やお酒が欲しくなるようなものばかり。お腹が鳴りそうな研修会となった。今回は、蒲郡市竹島水族館の小林龍二学芸員にも講師として参加していただき、会場は蒲郡情報ネットワークセンター・生命の海科学館をお借りした。

最初に行ったアジの耳石の観察では、小林学芸員の指導のもと、アジのひらきを使って、外部形態など観察したあと、頭部にある耳石をそ



耳石取り出しの様子



アジの耳石（成長線が見える）

れぞれ取り出した。参加者の中には、なかなか見つけることができず、予備として準備したアジを2匹、3匹と観察される方もあったが、幸い全員、耳石を取り出すことができた。小林学芸員から耳石の役割などの話を聞き、双眼実体顕微鏡で年輪のような成長線を観察した際には、形のおもしろさやつややかな光沢に驚きの声が上がった。なお、残った体の部分は、持ち帰ってもらった。夕食のおかずとして味わっていただけたことと思う。

続いて行ったシラスの観察は、シラスに含まれるシラス以外の生き物を探すという単純な実習であったが、予想どおり皆さん熱中して、予定時間はあっという間に過ぎてしまった。魚の仔魚や甲殻類の幼生、タコやイカなど様々なものが見つかり、双眼実体顕微鏡で観察した。



シラスの中に入っていた様々な生き物



自慢の一品を観察

最後に、それぞれ自慢の一品を見ようということで、ほかの方が取り出したものを見て回った。時間が十分に取れなかったのは残念だったが、終始和やかな雰囲気の観察となった。

昼食の後には、生命の海科学館の常設展示を自由見学させていただき、休憩時間まで有意義な時間をすごすことができた。

午後はサザエの歯舌とイカのカラストンビの観察を行った。サザエの解剖は思ったより手際よく進み、十分に観察することができた。歯舌は軟体動物が餌を食べるための器官であるが、こんなものがサザエの中に入っていたのかと、始めて見る皆さん驚いていた。さらにキッチンハイターを10倍程度に薄めた水溶液に1時間ほどつけておくときれいな標本になることを紹介し、これについては、各自持ち帰ってから挑戦してもらうこととした。イカのカラストンビは、「焼きとんび」という商品名で販売されていたものを使用し、軟体部はもちろんみんなでおいしくいただいた。

生命の海科学館での実習の後は、小林学芸員の案内で竹島水族館のバックヤード見学を行った。餌の準備室や病気の魚を治療する



サザエの解剖の様子



サザエの歯舌（キッチンハイターで処理）



竹島水族館のバックヤード見学



オオグソクムシ

水槽など普段は見ることのできない水族館の裏側を見学し、企画展の企画運営に関する苦労などもお聞きすることができた。また、深海にすむオオグソクムシを触ることができたのも貴重な体験であった。

参加者は講師も含めて13名とやや少なめではあったが、かえって和気あいあいとした雰囲気で、よい研修会となったと思う。皆さんの今後の博物館活動に多少なりともお役に立てば幸いである。

今回、講師を引き受けいただいた蒲郡市竹島水族館の小林龍二学芸員と会場でお世話になった蒲郡情報ネットワークセンター・生命の海科学館の山中敦子学芸員に改めて感謝いたします。

（豊橋市自然史博物館学芸員 吉川博章）

<歴史民俗部門研修会>

歴史民俗部門研修会は、平成19年2月22日(木)に「子どもたちに対する博物館活動」をテーマに開催されました。会場となった「みのかも文化の森 美濃加茂市民ミュージアム」に集まった参加者は26館30名でした。午前中は「みのかも文化の森」において実際に来館した小学生に対する博物館活動を見学し、午後からは県内博物館の博学連携の現状について事例報告がありました。以下、当日の研修内容について簡単に紹介します。

《午前の部：活動状況見学》

■みのかも文化の森

「みのかも文化の森」の小学校と連携した教育普及活動はとても充実していて、その運営体制や学習メニューは参考になるものばかりでした。

この日は、市内の小学1年生の「生活科」と「国語」の授業を兼ねた「昔遊び」と「朗読」の授業実践を見学しました。復元された古い家屋が教室となる“生活体験館”では昔の雰囲気あふれる冷たい板張りや薄暗い照明の中で、朗読に聞き入る児童たちの生き生きとした表情が印象的でした。



朗読 「たぬきの糸車」

また、市内の小学校の全クラスがこの博物館を授業で利用しているためか、教員とスタッフの連携が非常にスムーズであり、余裕のある進め方からは博物館での授業にお互いが慣れている様子を垣間見ることができました。



みのかも文化の森 藤村氏から施設のご案内



生活体験館内で説明を聞く

《午後の部：事例報告》

■「子どもたちへの取り組み～学習係から～」

みのかも文化の森 西尾 圭氏

■「子どもたちへの取り組み～学芸係から～」

みのかも文化の森 藤村 俊氏

学習係と学芸係からのアプローチ方法について、それぞれの立場からの説明がありました。開館からあまり年月が経っていないためか、コンセプトや体制作りは非常に考えられていました。さらに、児童に対するアンケートや教員との打ち合わせを重視し、それらを次回に反映させていくといった担当者の意欲的な姿勢は研修受講者にとっても良い刺激になったと思います。

■「西三河におけるこどもたちに対する博物館活動の現状と課題」

豊田市郷土資料館 杉浦 裕幸氏

近年、市町村合併に伴い博物館によっては対応する地域が拡大しているところもみられます。その結果、人口や地域の拡大と対応する博物館の施設規模(職員数など)とのバランスが崩れ、効果的な活動が困難になってきています。このような時代の変化と博物館の活動の現状について、近隣の博物館からの聞き取り結果を中心に報告がありました。



事例報告を聞く

<美術部門研修会報告>

3月1日(木)、愛知芸術文化センターのアートスペースE・Fにおいて愛知県博物館協会美術部門研修会を開催した。参加者は事務局を含め26館37名であった。美術部門の研修会であったが、テーマを「美術館・博物館の照明について」としたためであろうか、約半数を他部門の館が占め、照明への関心の深さを感じられた。

また今回の研修は、午後のみと研修時間を短く設定したため、講師から講義内容の基礎的な事項に関する配布資料が2種類あり、事前学習が求められた。

■講義

講師に松下電工株式会社照明分社で美術館・博物館の照明を担当する藤原工氏を迎えて「美術館・博物館の照明について」と題し、講義いただいた。

■「日本モンキーセンターにおける学校との連携」

日本モンキーセンター 高野 智氏

開館から50年以上の歴史を持つモンキーセンターにおけるこれまでの教育普及活動について自己分析の結果を交えながら現在の状況について紹介がありました。私立ならではの苦労や発想などは、公立の博物館の職員にとっても今後の活動のヒントになった気がします。

博物館の価値といえば、ジャンルに関わらず莫大なコレクションや調査・研究活動などに視線を向けがちですが、それと同時に「学ぶためのきっかけ」を提供する場でもあります。今回の研修では、同じような問題を抱えている施設の工夫点や反省点を学ぶことで、問題点を再認識し、気持ちを新たにして魅力ある博物館活動に取り組んでいくきっかけになったように思います。

(碧南市青少年海の科学館 地村佳純)

内容は、まず照明の基礎的事項として“色温度”“演色性”“照度”“損傷”的それぞれの相関関係などについての説明があった。照度・損傷については作品、資料の保存の観点で日頃から意識されていることと思うが、作品、資料を見せるときには“演色性”が重要で、平均演色評価数の高い蛍光灯・電球を使用すべきとのことであった。しかし、蛍光灯・電球には色味



藤原工氏の講義

の違いがあるとの指摘もあった。次に展示空間における展示作法として“光源”“器具”“配光”“照度均齊度”“グレア”“映りこみ”などについての解説があり、グレアキャップや展示ケースの床面にグレー系の反射の少ない色を使うことで不快なまぶしさや映りこみを軽減することができるとのことであった。最後に、展示室のユニバーサルデザインとして、白内障など目に障害を持つ人などがより快適に鑑賞するには極端な照度差をつけない、キャプションを黒地、白文字にするなどの方法が考えられるが、展示の雰囲気を損なわない配慮も必要とのことであった。



展示室内での照明についてのケーススタディ

■ケーススタディ及び報告

参加者を4~5人の7班に分け、それぞれの班ごとに愛知県美術館で開催中の「若き日の美術家たち展」と「常設展」会場の照明について講義の内容などに注目しながらケーススタディを実施した。このケーススタディでは班ごとに照度計とデジタルカメラを用意し、気になった点をデジカメで記録、その画像をもとに2、3分の持ち時間で報告したが、どの班も短時間ではあったが積極的に研修をこなしていた。

各班の報告からは展示室入口と導入部の照度の差が大きい点やスポットライトのライティングの意図について、展示ケースの照明器具の照度や角度、展示室天井部の自然採光の方法など同様な点に関し報告が集中したが、愛知県美術館の深山さんから館側の事情も含め説明していただいた。講師からは、所蔵作品のバラエティーに富んだ内容の展示で個々に照明をセッティングする難しさはあるが、照度を低く設定すべき作品は同じコーナーにまとめるなど展示構成を整理することで、より良い照明、

展示空間の演出ができるのではないかとの指摘があった。



展示室内での照明についてのケーススタディ

■照明何でも相談室

ケーススタディの報告までに時間を取り過ぎたため2件の質問に対し、講師のコメントをいただけなく止まってしまった。



ケーススタディの報告

今回のケーススタディでは研修に熱が入ったため、展示室の中で一般観覧者への気配りが欠けた面があったので、今後に向けては日程を考慮しなければならないと感じた。

最後に、公私とも多忙を極める中、今回の講義をお引き受けいただきました講師、並びにこの研修に展覧会場を提供いただきました愛知県美術館に深く感謝申しあげます。

(稲沢市荻須記念美術館 日野幸治)

「愛知の博物館」No.85

発行日 平成19年3月31日
編集・発行 愛知県博物館協会

〒489-0965
愛知県瀬戸市南山口町234番地
愛知県陶磁資料館内
TEL<0561>84-7474
FAX<0561>84-4932